



2021.7.22



★—— メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます。——★

【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

★—— 皆様からのご意見、ご感想をお待ちしています。——★

編集部: <https://www.ajalt.org/local/soudan/contact.html>

==== 目次 =====

1 ■ともに生きる：三重県から■

今、ここで世界と生きる

JICA 海外協力隊ブラジル OG、小学校教員 藤川 純子

2 ■AJALT からのお知らせ (1) ■

AJALT の著作教材を活用した

「日本語教師のための教え方講習会」開催のお知らせ

3 ■進学進路ガイダンス情報 (7 月、8 月) ■

4 ■AJALT からのお知らせ (2) ■

オンライングループプレッスン (AJALT) のご案内

=====

1 ■ともに生きる：三重県から■

AJALT では、今年度のメールマガジン「こだま」は、「ともに生きる～地域、日本、そして世界で」をテーマに発信しています。新型コロナウイルス感染症を背景に、離れた場所ともオンラインでつながる可能性が広がりました。今いる場所、そこでの活動の中で、世界各地のことも同時に考える、今回は海外での教育を経験し、三重県の小学校で外国からの子どもたちの教育に携わる藤川先生に、青年海外協力隊三重県 OB 会主催連続パネルトークをご紹介します。

.....

今、ここで世界と生きる

JICA 海外協力隊ブラジル OG、
小学校教員
藤川 純子

◆三重県で仲間と踏み出した一歩

きっかけになったのは、一人の女の子の虐待死だった。2017 年夏、四日市市で 6 歳のブラジル人の女の子が同居する母の恋人に殺され、痛ましい状態で発見された。事件当時、彼女は不就学だった。三重県の外国人住民数は、2020 年末で 54,854 人。県内総人口に占める割合は、全国第 4 位、日本語指導が必要な児童生徒の割合は全国 1 位である。

「私たちにも何かできることがあるのでは？」…SNS で声をかけ合い、数人の隊員 OB がネパールレストランに集まった。JICA 海外協力隊として開発途上国で活動経験のある私たちは、「外国人」として途上国で過ごした経験から日本の文化や教育制度に対する新たな気づきを得てきた。そんな熱い思いを住民、当事者、支援者、学校教員と共有・交流することで、三重県の多文化共生がより進むためのアイデアを生み出していけるのではないかな。

◆「外国人の子どもの教育を考える」オンライン企画

2019 年度は、外国人の子どもの教育の「現在」「過去」「未来」をテーマに 3 回、県内各地の会場で、2020 年度からは「南米」「アジア」をテーマに、オンラインで実施している。いずれの回も 3 人のゲストスピーカーに一人 15 分程度話題提供してもらい、ファシリテーターが話し合いたいテーマを絞る。その後のグループセッションで OB が各グループに入って意見をまとめる。各回定員を超える盛況ぶりで、県内外で多文化共生を考える人々の、新しいつながりを生む機会にもなった。

今年 6 月 5 日にオンラインで開催した「もっと知りたい！海外の教育事情 2 アジアーフィリピン、ベトナム、シリアー」では、参加者から「世界のリアルを知ることができてよかった。さらに興味を持つことができた」等の感想が得

られた。私自身も、いろいろな思いをみなさんと共有することができた。

◆ベトナムでの見聞

海外の教育制度を知ることも含め多文化共生に向けて JICA との連携でできることってなんだろう、ベトナムの人の誠実さ真面目さは現地の教育のあり方がすごく影響しているのかも、「遊び」「ダンス」「楽しめること」は共生の入り口になる等…。

ベトナムでは始業時にチャイムではなく太鼓を叩く。こんな違いを一つとってみても私たちの学校の「当たり前」が国や地域によっては「当たり前」ではないということを知るきっかけになる。学習者の文化的背景を知ろうとすることが大切だ。

◆フィリピンの先生のひと言

フィリピン OB の堤さんは、活動に行き詰まっていたころ現地の先生から「勝手に日本からやってきて、うちの言葉も文化も大事にしてないのに、偉そうにすんじゃねー！！（原語のニュアンスを和訳）」と、言われて目が覚めたという。「ボクは支援者で、被支援者を支えるものだと思っていた。でも、それは全然違っていった」と彼はコメントした。「教える」という立場にあるとつい自分の方が優れているという意識を持てしまいがちである。しかし「センセイ」だからすごいわけじゃない、「日本人」だから優れているわけじゃない。お互いにギブしあい、テイクしあう対等な関係性からこそ本当の学びは生まれるのだ。

◆シリアで考えたこと

シリア OB の田村雅文さんは、著書「非戦・対話・NGO」（2015）の中でこう述べている。「私たち人間はみな異なる。一方で共通点も沢山ある」「想像してほしい。私たちが寝て、起きて、食事をするように、成長し、夢を持ち、恋し嫉妬をするように、出会い別れ、結婚し子どもを授かり、産み、育てていくように、かれらも同じ営みの中を生きている」

私たちはひとりひとり違う。でも同じ時代を同じ場所で生きている。「一人の100歩より100人の一歩」が、私たちの住む社会を、地球を、よりよくする。まずは互いを「知ろうとすること」、「伝えようとする事」から始めたい。共

に…！

本オンライン企画シリーズは、次回「アフリカの教育事情」をテーマに 2022 年 1 月の実施を予定している。(青年海外協力隊三重県 OB 会 Facebook ページ <https://www.facebook.com/JOCVOBOGMIE>)
